

## 2月3日 節分

夜10時過ぎ。カナコはほっとため息をついた。

6歳のカイトをお風呂に入れて、ベッドに寝かしつけたのが9時ちょっと前だった。それから、明日の朝ごはんとお昼のお弁当の準備をして、洗濯物をたたんだ。あっという間に1時間が過ぎた。カナコとカイトの二人が住む2LDKのマンションの掃除は、一週間に1回、土曜日の午前中にするとカナコは決めていた。だが、月に1回はしっかりやる。その日はカイトが一日中家にいないので、掃除に集中できるからだ。それは、元夫のサトシとカイトの、月に一回の面会日だ。

カナコとサトシは2年前に離婚した。結婚後、お互いの仕事が忙しくて、なかなか二人の時間が作れなかったこと、カイトが生まれて、仕事をしながら保育園の送り迎えや食事の用意などに忙しくなったカナコを、サトシが仕事を言い訳にしてあまり手伝ってくれなかったことなど、理由はいろいろあったが、一番の理由はサトシに他の女の存在を感じ始めたことだろう。「週末も仕事がある」と出かけていったサトシがうちに戻ったとき、甘い香水の香りを感じるがあった。それは、カナコがつけるタイプの香水ではなかった。

そんなサトシの浮気の可能性に対して、カナコは怒りや悲しみよりも、自分だけ楽しんでずるいという気持ちになった。一人だけ楽しい思いをして、子育てとか家事とか、めんどくさいことは全部私ばかりに押し付けて、ずるい。それがカナコの本音だった。

離婚の手続きは、結婚のときよりもめんどくさかった。それでも、サトシも離婚に反対しなかったこと、一緒に住んでいたマンションからサトシだけが出ていって、カナコとカイトはそのまま住み続けることができたことなどを考えると、ずいぶん楽な離婚だったとカナコはあとで思った。

サトシは離婚するとき、一つだけ条件を出してきた。それが月に1回のカイトとの面会だった。カナコはもちろん同意した。離婚はカナコとサトシの間の問題で、カイトから父親を奪うことは別の話だった。それに、サトシはそれなりにカイトをかわいがっていたし、カイトもサトシと一緒にいるのを楽しんでいて。

月に1回の面会の日、サトシはマンション入口でベルを鳴らした。カナコはカイトをエレベーターまで見送り、カイトは一人で下まで降りて、サトシを出迎えた。サトシはカイトとその日一日を過ごした。遊園地、ドライブ、デパートのおもちゃ売り場、どこに行っても、何をしたら、うれしそうな笑顔でうちに戻ってきたカイトが教えてくれた。カナコにはそれだけで十分だった。特に、サトシの

新しい生活、新しい家、そして新しい女のことは、知りたいとも思わなかった。実際、カナコはサトシが今どこに住んでいるかということにさえ、興味がなかった。カナコとサトシの間には、会話もなかった。カイトからの話が、カナコの知るサトシの全てだった。

それでも、カナコがサトシと顔を合わせる日は一年に一日あった。それは節分の日だ。毎年節分の日が来ると、カイトが豆まきをしたがった。そして、豆まきには、カナコではなく、サトシに鬼の役をしてもらうことが条件だった。

スーパーに節分の豆のコーナーができるころ、カイトはすぐにカナコに聞いた。

「ねえ、ママ。豆、売ってるよ」

毎年のことだが、どうしてこの子はこんなに節分の豆まきが好きなんだろう、とカナコは思った。

「そうね、今日買っておこうか。」

カナコは豆まき用の豆と、鬼の面も忘れずに買っておいた。これをサトシがつければ、鬼になる。色鮮やかなその鬼の面は、怖い顔のはずだが、子供向けだからなのか、ちょっとやさしい顔立ちだった。そのせいか、怖そうな顔をしているが、見る角度によってはなんだか泣きそうな顔にも見えた。

節分の日、マンションの入口でベルを鳴らすサトシに、インターフォンで「今ドアを開けるから、そのまま入ってきて」とカナコは伝えた。上の階まで上がってきたサトシは、玄関のドアを開けた。カイトは「パパ」と叫んで、サトシに飛びついた。サトシは笑顔でカイトを抱きしめながら、部屋をぐるっと見まわした。その目は、かつて自分が住んでいたころと今とで何が同じで何が違うかを探しているように見えた。サトシのそんな間違い探しのゲームを、カナコは少し離れた場所から眺めていた。

サトシはカナコにも同じ笑顔を向けて、「今年もしっかり鬼をやるよ」と言った。なんだか変な言い方に、カナコも笑いながら「はい、今年もしっかりお願いしますね」と言って、用意しておいた鬼の面を手渡した。

豆まきが始まった。豆まきのやり方はいろいろだが、一般的なのはこうだ。まず、窓やドアを開けて「鬼は外<sup>おに そと</sup>」と言いながら、家の外側へと豆をまき、それからすぐに窓やドアを閉める。次に家の内側に向かって、「福は内<sup>ふく うち</sup>」と言いながら豆をまく。つまり、「鬼は外」と「福は内」を交互に行うことで、悪いものを外に追い出し、良いものを家へと招くのである。

しかし、カナコはカイトのやりたいようにやらせていた。カイトのやり方はこうだ。鬼の面をかぶったサトシが家の中を走り回り、それをカイトが追いかけてまわして、豆をまく。そして、「鬼は外」と言う。サトシは洗面所、台所、それか

らカイトの部屋と、部屋中を走り回った。カイトは豆をにぎる手を振り上げて、「鬼は外！」とサトシをめがけて豆をまこうとする。カイトは興奮しすぎて、たくさんの豆を投げられないで、数粒の豆が床に落ちるだけ、ということもあった。窓を開けてベランダへと移動したサトシを追いかけ、窓越しに「鬼は外」とカイトが豆をまいた。ベランダに豆の散らばる音が響き、カナコは近所から騒音の苦情が来るのではないかと心配になった。カイトは鬼を追いかけまわし、盛大に豆をまいた。鬼が玄関のドアを開けて、外に出ていくまで、カイトは「鬼は外！鬼は外！」を繰り返した。

一度外に出ていったサトシが、鬼の面を外して戻ってきた。ずいぶんと走り回ったので、息が切れ、額には汗が浮かんでいた。息を整えながら、リビングのほうへと歩いてくる。

「鬼はもう出て行ったよ」とサトシはカナコに声をかけた。カナコは「カイト、鬼はもう出て行ったらしいよ。ありがとうね」とカイトの頭をなでた。床や廊下の上には、あちらこちらに豆が落ちている。カナコは「カイト、あの豆を拾うのを手伝ってくれない？」と声をかけた。「はあい」と元気な声でカイトは豆を拾いだした。これも遊びの一種だと思っているようだ。

サトシは台所に行って、戸棚を開けるとコップを取り出し、水道の水をいっぱいに入れると一気に飲み干した。ごくごくと音を立てて水を飲むサトシの首筋

を見て、前よりちょっと太ったかなとカナコは思った。

「ママ、豆、拾ったよ」とカイトは箱に入った豆をカナコに差し出した。「早かったね、ありがとう」とカナコは受け取り、「じゃあ、年の数だけ、食べようか。カイトは6歳だから、6粒ね」と右手の上に豆をおいてやった。カイトは、一粒ずつ口に入れながら、サトシのほうへと歩いていき、その足に抱きついた。

サトシが帰ってから、カナコとカイトはスーパーで買ってきた恵方巻を夕食にした。こんな習慣、小さいころはなかったのにな、とカナコは心の中で思いながら、その年の恵方である、南西の方向を向いて、無言で恵方巻という名前の海苔巻きを食べた。

お風呂から出たカイトは、疲れたのか、自分からベッドに入り、すぐに寝息を立てはじめた。カナコは缶ビールを手に、窓の外の方を見上げた。空気は澄み切って、いつもよりたくさんの星が見える。きれいだな、と思って眺めていたら、ふと涙が出そうになった。疲れたからかもしれない、とカナコは思った。人は疲れているときに泣きたくなるものだから。

そろそろ寝ようと思って、カーテンを閉めようとしたとき、カナコは足の裏に軽い痛みを感じた。カナコが踏んでいたのは、カイトが拾い忘れた、節分の豆の一粒だった。カナコはその一粒を拾い上げた。今年も節分は無事に終わった。きっと来年もその次の年も、同じようなことを繰り返すのだろう。でも、いつか

カイトは鬼を必要としなくなる。豆まきを今日みたいに楽しめなくなる。何年後かわからないが、その日が来るまで続けるしかない。この不思議な家族ごっこを。

そういえばカイトは一回も「福は内」と言わなかったなど、カナコは思った。  
そして、小さな声でつぶやいた。

「福は内」

(3410 字)

(2022.8 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<https://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.